

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

「人間は自然の中で一番弱い一本の葦わづにすぎない。しかしそれは考える葦である」——よく知られたパスカルの言葉である。

ところで、なぜ「葦」なのだろうか。葦の代わりにバラとかサボテンとかを置き換えることはできるだろうか。パスカルの文脈からいえば、形式上はできなくはないように思える。「人間は考えるサボテンである」と。しかし、何となくちぐはぐな感じが残るであろう。なぜだろうか。パスカルが「葦」に比喻を求めたのは思いつきではなくて、何か理由があつたのではないだろうか。

ときどきいわれるのは、彼が新約聖書の次の言葉を念頭においたという解釈である。すなわち、イエスが群集に向かって、「汝らは何を見ようとして野に出てきたのか。風に揺らぐ葦であるのか」と。イエスは、群集がバプテスマのヨハネを知らずに、ただ風に揺らぐ葦を見ていることをたしなめている。ここでいわれる葦は、野に生えているとるに足らぬもの、という意味である。そういう葦にくらべて、バプテスマのヨハネは、「女の産んだ者の中で彼よりも大きい人物は出てこなかった」とされる人物である。そういうヨハネは、風にそよぐ葦にくらべると、何と大きな存在であることか。しかしイエスは、「天国で最も小さい者も彼よりは大きい」とつけ加えた。そうだとすると、逆に、一本の葦はますます小さな、とるに足らない存在ということになる。そういうつまらない存在としての葦でさえ、もしそれが「考える葦」となるなら、それは宇宙よりも高貴である、とパスカルは言ったのだろうか。

パスカル自身は「自然の中で一番弱い葦」という言い方をしている。しかし、葦は本当に弱い植物だろうか。^①ここに疑問ないしヒントがある。実際の葦はそんなに弱くはないのである。それは水辺に群生し、二メートルの高さに達し、強い繁殖力をもっているのである。

もう一度パスカルの言葉を見てみよう。フランス語の原文では、パスカルの言う「葦」には単数形の不定冠詞がついている。この不定冠詞をあえて訳して「みる」ということになるだろうか。そうすると「人間は一本の考える葦である」となる。群生する葦ではなくて、一本の葦——こうなると、少し事情が変わってくる。なぜなら、群生の場をはなれて一本だけで立つということは、まさに自然のう

ちで一番弱い存在になることだからである。人間でも、社会からソ外されたときほど弱い者はいない。

では、そういう弱い一本の葦と「考える」ということとは、どう結びつくのだろうか。私には、「一本の葦」が考えるのではなくて、^②「考える葦」がそれぞれ一本の葦になる、というふうに思われる。どちらも似たような表現であるが、意味はちがう。一体、人が何かを考えるというとき、彼はどのような状態にあるだろうか。「考える」ということは、どこまでも自分一人にもどって、自分の内面で考えるということである。共同でディスカッションをしているときも、人から教えられて考えるときも、考えるという作業そのものは、自分で考える作業であり、自分一人になるという面をもっている。

「考える」ということは、一方で群生することを必要とする人間が、自分の内面にもどつて、死すべき者としての絶対の有限性に直面することである。しかし他方でこの内面は、他の人間と共有する最も基本的で深い根にとどく。一本の葦は枝葉によつて他と交わるときは、本当は交わっていないのである。むしろ孤独な一本の存在にもどることによつて、一本の葦はかえつてその根もとで他との共同存在の根ないし根拠を獲得する。そういう根拠として、人間の思惟は人間存在の本質をなすともいえる。

人間存在の本質を「思惟」に見るというパスカルの見方は、西洋哲学の中にあらわれる一つの典型の見解である。それだけに、このパスカルの「考える葦」はひとつの問いに転化することもある。すなわち、はたして人間本質は思惟にあるのか、と。人間は一本の考える葦という一面はもつとしても、それは一面であって根本ではない、という見方が出てきてもおかしくはない。そういう転化の可能性を念頭において、さらにこの比喻の含みを考えてみよう。

パスカルは「人間が「自然の中で一番弱い一本の葦」ではあっても、それは「考える葦」として、自分をおしつぶさんとする宇宙全体よりも高貴である」と言う。そしてその理由として、「人間が死ぬことを知っている」という点を挙げた。宇宙は、その生成変化によって、一本の葦どころか、大陸や海洋や星^③のものの存在をさえおしつぶすこともある。ただし宇宙はそれを知らない。人間だけがそのことを知り、且つ考える。「死ぬ」ということについて人間が自

55

(注) バプテスマのヨハネ…イエスに洗礼(バプテスマ)を施した預言者ヨハネのこと。

問一——線 a と e の漢字と同じ漢字を含むものを次の各群の A から一つずつ選び、記号で答えよ。

a
ソ外

オ	エ	ウ	イ	ア
国のイシズエを築く。	敵の前進をハバむ。	徒党をクんで戦う。	苦痛をウツタえる。	上司からウトまれる。

ア

b
環キヨウ

オ	エ	ウ	イ	ア
大きな音にオドロく。	生死のサカイをさまよう。	後ろ姿をカガミに映す。	新製品の開発をキソウ。	ことばのヒビきがよい。

工

示サ

オ	エ	ウ	イ	ア
人をソソノカす。	ヒダリの道を行く。	雲間から日がサす。	犬をクサリにつなぐ。	模型をツクる。

オ

d
シヨ産

オ	エ	ウ	イ	ア
その話はハツ耳だ。	堪忍袋のオが切れる。	明るいトコロに出る。	今年の夏はアツい。	長い手紙をかく。

ウ

e
ボウ張

オ	エ	ウ	イ	ア
遠く富士山をノゾむ。	進行をサマタげる。	道のカタワラに咲く。	つほみがフクラむ。	綿から糸をツムぐ。

イ

いえる。このとき思惟はその一々の働きにおいて宇宙を包んでいるともいえる。

(大橋良介『『考える葦』の場合』による)

(大橋良介「『考える葦』の場合」による)

問二 — 線①「ここに疑問ないしヒントがある」とあるが、パスカルの言う「弱い葦」と実際の葦との違いが、どうして「疑問ないしヒント」になるのか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 葦は、実際には必ずしも弱い植物ではないので、「弱い葦」と表現することによって、現実には存在しない特別な葦であることを示すから。

イ 葦は、実際には必ずしも弱い植物ではないので、「弱い葦」という表現そのものに、葦は強いという反語的な意味が込められてくるから。

ウ 葦は、実際には必ずしも弱い植物ではないので、「弱い葦」ということによって、「考える葦」を連想させることができるから。

エ 葦は、実際には必ずしも弱い植物ではないので、「弱い葦」と考えるためには、「一本の葦」という性格を考える必要が出てくるから。

オ 葦は、実際には必ずしも弱い植物ではないので、「弱い葦」という場合には、新約聖書の言葉に基づいていることがわかるから。

「エ」

問三 — 線②「『考える葦』がそれぞれ一本の葦になる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 考えるという作業は自分の内面における作業であり、集団や共同体といったものから切り離された存在となることを自らに強いるようになるということ。

イ 考えるという作業は自分がなにものであるかという問題意識を改めて持たせ、集団や共同体から離脱することによって生まれてくるものであるということ。

ウ 考えるという作業は人間が弱い存在であることを自覚する作業であり、自分と集団や共同体との関わりを新たに問うことになるということ。

エ 考えるという作業は社会から切り離されて初めて成立するものであり、その考えるという作業に他の作業を排除してまでもこだわりの続くということ。

はさらに、人間が宇宙全体よりも高貴であることを明らかにしている。

ウ 「考える葦」は思惟が宗教や社会や歴史の始まりであることを教え、また、考えることは一本の葦が湿地に生えるのと同じであるから、「考える葦」はさらに、考えることでただ一人に戻るといふ人間の本質を教えている。

エ 「考える葦」は考えるという人間の本質を示し、また、一本の葦は生存の宇宙的諸条件を内に映すことで宇宙を包んでいるところから、「考える葦」はさらに、理解することによって包むという考える作業の本質を示している。

オ 「考える葦」は宇宙がその構成員を包んでいることを人間に教え、また、葦はその宇宙を内に映しているのだから、「考える葦」はさらに、考えることによって宇宙を包むという思惟の本質を明らかにしている。

「エ」

問六 本文の論旨に合致するものを次のア～カから二つ選び、記号で答えよ。

ア パスカルの「葦」を人間の比喩としたのは、『新約聖書』の言葉として、バラとかサボテンに見られない「弱さ」のイメージがあったからである。しかし、バプテスマのヨハネという「大きな存在」と対比すると、その「弱い葦」は「考える葦」という宇宙よりも高貴な存在となることをパスカルは忘れてはいなかった。

イ パスカルは、水辺に群生し強い繁殖力を持っている葦を、「一番弱い一本の葦」ととらえて、そこに人間存在の本質を見いだした。それは、死の自覚を通して孤独な存在に帰ることによって、他の人間と共有する存在の根源にも深く根づくことができることを意味する。

ウ 西洋哲学では、群生する葦を「一本の葦」へ引き離すような思考法をとってきたが、パスカルは、その思考法を転化する問いかけをすることによって、「一本の葦」を包んでいるものを逆に包みかえすという発想を持ち合わせていた。その点で、パスカルは西洋哲学に貢献した。

エ 絶対有限の存在である人間が、あらゆる存在をおしつぶす力を持つている宇宙全体よりも高貴だと言われるのは、人間自らが、孤独であり有

オ 考えるという作業は外からの啓発と内的な動機によって促されるものであり、その結果集団や共同体の場での自らの立場も明確にされていくということ。

「ア」

問四 — 線③「ただし宇宙はそれを知らない。人間だけがそのことを知り、且つ考える」とあるが、どうしてそのように言えるのか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 宇宙は空間として人間を呑み込むに過ぎないが、人間は一人になることで宇宙を包むことができるから。

イ 宇宙は考えることをしないが、人間は考えることで自らの有限性に直面することになるから。

ウ 宇宙は無限の空間として人間を一つの点に変えるが、人間の思惟も実は宇宙の表現であるから。

エ 宇宙は自らの生成変化で人間をおしつぶすが、人間は孤独になることで他の死すべき存在と結びつくから。

オ 宇宙は広がり続ける空間であるが、人間は考えることによってその果てをとらえることができるから。

「イ」

問五 — 線④「ここに、『考える葦』のさらに巧みな比喩性がある」とあるが、「考える葦」が「さらに巧みな比喩」になっていることの説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「考える葦」は強い葦と弱い人間との対比から人間が死すべきものであることを教え、また、包むことは理解することであるから、「考える葦」はさらに、人間の思惟が宇宙の一つの点としての表現であることを示している。

イ 「考える葦」は思惟が本当に人間の本質であるのかという問いを導きだし、また、人間が「死ぬことを知っている」ところから、「考える葦」

限であることを知らないからである。このような認識から宗教や社会や歴史が始まったとパスカルは考えた。

オ パスカルの「宇宙は空間によって私を包み、一つの点としての私を呑み込む」と「思惟によって、私は宇宙を包む」との間に「しかし」と挿入したのは、明らかに転化の論理を持ち込んだことを示している。このような、発想の多様性と独自性にパスカルの哲学の偉大さがある。

カ パスカルによれば、「考える」ことによって理解することは、「考える」ことによって包むことであると言われているが、この含蓄のある言葉は、人間存在にはさらに永遠や宇宙をも包み込む働きがあることを明らかにした。つまり、人間は「考える」という作業によって自分自身を超えていくのである。

「イ」「カ」

テーマ: 「葦」と通じた人間存在の考察

内容、要点: 前半は問六のイ、後半は問六のウ

「一本の葦」から、人が「考える」ということについて考察を深める。
→ 人間の思惟と人間存在の本質と捉える。

「考える」ということは、内面的にも外面的にもゆるゆるの世界を広げ、その理解が包み込むことであり、人間は思惟により宇宙を理解し包み込む。